

孫文のアジア主義と日本

——「大アジア主義」講演との関連で——

嵯 峨 隆

はじめに

第一章 日本論壇でのアジア主義言説

第二章 一九二〇年代半ばまでの孫文の対日観

第三章 日本滞在中の孫文
おわりに

はじめに

本稿は、一九二四年一月における孫文の「大アジア主義」講演を、彼のアジア主義言説の流れの中で位置付けようとする試みである。

アジア主義は近代日本で生まれた思想である。それは、アジア諸国が連帯して西洋列強の圧力に対抗することを旨としていたが、それを「主義」として規定するには極めて曖昧であり、且つ多様な形態を取って現れた言説

の集積であった。加えて、それは出現当初から人種的観点と日本の指導性を以って特徴としていた。日清戦争前後にはアジア・モンロー主義なるものが盛んに唱えられたが、その実態はアジア主義と殆ど変わるところはなかった。総じて言えば、一九一〇年代末までの日本の論壇に現れたアジア主義は、反欧米列強・反白人種を唱えながらも、アジアからのフィードバックを欠き、そのため日本と他の諸国が対等であるべきだとする発想を持たぬ、日本主義を本質とする偽装された連帯の思想であったのである。⁽¹⁾

しかし、アジア主義は中国でも唱えられるようになる。量的に見て、その言説は日本の論壇に現れたものと比べればかなり少ないが、特徴的であったことは、それを唱えたのが政治的変革を志向するカウンター・エリートたちであったということである。日本のアジア主義と最も対照を為すのは李大釗の「新アジア主義」であり、それはアジア民族の解放を基礎としてアジア全域の変革を志向するものであった。だが、彼の提起したアジア主義を継ぐ者は現れることはなかった。今一人、アジア主義を提唱した人物として知られるのは孫文である。彼のアジア主義という言説の用例は、多分に日本からの影響によるものと考えられるが、一九一〇年代末に至るまでの内容を見ると、その実質は殆ど日中提携論の別名でしかなく、他のアジア諸民族の解放ということは視野に入っておらず、日本のアジア主義に対抗する意図を持ったものではなかった。そして、それは黄白人種闘争を唱えながらも、白人種の支配に取って代わろうとする国際システムの転換を意図する構想を持ったものでもなかったのである。

それにも拘らず、孫文には常にアジア主義者としてのイメージがつきまとう。その理由は、一九二四年一月に神戸で行われた「大アジア主義」講演にある。そして、それについての一般的な評価では、孫文がアジア固有の伝統に基づいて諸民族が連帯する必要性を説くと同時に、日本の侵略的本質を見抜き失望し、これとの完全な訣別を図ったものと見なされてきた。そうした評価は、晩年の孫文の思想が著しく反帝国主義的民族解放の側に

傾いたと見なすことから生じるものである。ここでは、言わば孫文思想の直線的な進化が念頭に置かれている。⁽²⁾しかし、それまでの孫文のアジア主義が自国中心主義であり、しかもそれが日本の言説の流れに乗ったものであったとすれば、晩年の立場はそうした状態から転換を果たしたと見るべきものであろうか。或いは、それは逆に従来からの持続の上にあったと評価すべきなのであろうか。

本稿は、以上のことを考察すべく、先ず一九二四年時点における日本のアジア主義言説の特徴を概観し、次いで孫文の対日観が日本の思潮と噛み合う性質のものであったのかを見て行くことにする。そしてその上で、「大アジア主義」講演が意図したものは何であったか、そしてそれが彼の対日観ひいては思想全体の中で如何なる評価がなされるべきかを検討することとしたい。このことは、最終的には、孫文が実質を伴った「アジア主義者」であったかという問題にまで関つて来ることであらう。

第一章 日本論壇でのアジア主義言説

一九二〇年代半ばの日本の論壇は、西洋白人種による世界支配に対する憤りで満ちていた。その遠因となったのは、パリ講和会議に日本が提出した人種差別撤廃要求が否決されたことである。このことは、日本がまだ欧米列強から対等で信頼できるパートナーと見なされていないことを象徴するものと受け止められた。こうした心理的衝撃は、一時鳴りを潜めていたアジア主義的心情を刺激する下地となったと言うことができる。⁽³⁾そして、これに決定的な打撃を与えたのが、アメリカにおける排日移民法の成立であった。一九二四年四月以降、日本の世論はそれをアメリカ議会による意図的な侮辱であると受け止め、東京を中心とした一四の新聞社は抗議の共同宣言文を発表し、更には法案成立に抗議するための出版物も相繼いで刊行されたのであった。⁽⁴⁾

そのような情況の中で、一時的に忘れられていた観のあるアジア主義が再び脚光を浴びることになる。当時の総合雑誌には、アメリカの排日問題を取り上げ、それまでの日本の外交政策を批判する論説が盛んに掲載されるようになる。ここで、それらに掲載された幾つかの記事を見て行くことにしよう。

論壇において、最も先導的な役割を果たしたのは『日本及日本人』である。同誌第四七号の論説ではアメリカの日本人排斥問題を取り上げ、白人種が最も恐怖を抱いているのは、「日本民族の無限大なる蕃殖と、その驚くべき進化」であり、「米人が太平洋沿岸の好植民に対し、ショービニストたるの感情を誘発せしめらるゝ所以は、実にこの偉大なる勃興力を示せる国民の将来を恐怖せるに依る」と論じた。⁽⁵⁾そこには、日露戦争勝利後におけるアジアの保護者としての自負心と共に、欧米列強からは対等に扱われないことに対する金だ感情が混在していたことが見て取れる。そうした姿勢は、同誌次号における「大亜細亜聯盟」の提唱へと展開する。ここでは、白人種である中国が欧米列強の侵略に抗しきれない現状を嘆きつつ、「米人が『白人米国』をいふの当然ならば、亜細亜人が『有色亜細亜人』を主張するは、更らに当然なる意義を有す」と述べ、アジアから白人種は撤退すべきであると論じていた。⁽⁶⁾ここからは、日本が未だ差別される側にいるという危機感を梃子として、曾てのアジア主義とモンロー主義が拡大再生産されている様子が窺えるであろう。

有力な総合雑誌であった『太陽』においては、大石正巳が「アジア民族の総同盟を策せよ」と題する論説を發表し、アメリカの排日法案の通過は、「単に我国に関する問題たるばかりではなく、亜細亜民族、即ち有色人種に関する重大問題」であるとする立場から、「支那、印度に向つて、宣伝使を派して大々的のプロパガンダを決定し、真正なる人種的の輿論を作らねばならぬ」⁽⁷⁾として、白人種に対向するための「有色人種聯盟」の組織を提唱していた。また、大石ほど極端ではないとしても、アメリカの排日法案の通過は外交手段では解決不可能なほどに深刻な事態であるとし、有色人種は白人種の離間策に嵌まらないように、暫くは隠忍自重して、日中を中心

とする人種的団結を固める必要があるとの意見も見られた⁽⁸⁾。

もちろん、このようなアジア主義言説の台頭に対して批判的な意見がなかった訳ではない。例えば、東洋学の泰斗として知られる稲葉君山は、大アジア主義の主張には「余り賛成の出来ざるのみか、その動機の不純なることに対して、寧ろ輦蹙を禁じ得ないものがある⁽⁹⁾」として、否定的な立場を示した。彼によれば、本来、日本人には「大アジア主義」などという発想は存在していなかったのだが、それが声高に論じられるようになったのは、関東大震災による国家的打撃のために国力が著しく低下したこと、そしてアメリカの排日問題によってプライドが傷つけられたためである。従って、その動機は純真ではなく、一時の方便に過ぎないのである。

加えて、稲葉は当時の状況下では大アジア主義が実現する可能性は極めて低いと見ていた。その障碍の第一は、これまでの日本外交が余りにも拙劣であったため、今更「アジア人のアジア」などと言っても、近隣諸国では虚心坦懐に受け止められるかどうかは疑問であることである。そして第二の障碍は、アジア民族の現状が大アジア主義の成立に向かって歩調を一にし得るか疑問であることである。何故なら、アジアといっても多様であるし、中国を事例として考えれば、国家意識を欠如している彼の民族が、国家の存立を基礎とする所の大アジア主義に共鳴して列強に抵抗しようとするとは考えられないからである。⁽¹⁰⁾ここで稲葉が示した第二の点は、恐らく当時の多くの日本の識者が中国に抱いたイメージであったと言えるであろう。

以上のように、一九二四年の夏にかけて大アジア主義をめぐる議論は再燃する兆しを見せていた。そうした中で、同年一〇月には「大亜細亜主義」特集を掲載した『日本及日本人』の秋季増刊号が刊行された。該誌には長短取り混ぜ五〇篇の論説が掲載されていた。記事全体を見ると、条件付きを含めても大アジア主義を支持する立場のものが圧倒的多数を占めているのであるが、特集の総論とも言うべき「大亜細亜主義の確立」という論説が、先に触れた大石正巳の手によるものであって、そこで「米國議會が排日案を決議したるは、全亜細亜民族に対す

る大宣戦を布告したる者なり⁽¹¹⁾として、それが日本の主権を侮辱し、正義人道を蹂躪して自ら太平洋を支配し、大陸に野心を逞しくするものであると論じられていることは、この特集が意図するところを明確に示すものであったと言えよう。

確かに、論点や力点の置き方は様々でも、『日本及日本人』特集号の記事の多数は大アジア主義を肯定的に捉えるものであった。ただし、全てのアジア民族を打って一丸とすることは非現実的であるため、その中心となるべきは日本と中国（更に広げてインドまで）であるとする意見が多く見られた。そして、そこで見られるのは日本の指導者の立場の強調である。ある論者は次のように説く。我々が言う「亜細亜主義」とは何か。それは「日本が、『東洋の盟主』としての地位並自覚が生んだ所謂亜細亜主義であり、東洋モンロー主義であらねばならぬ。而して同文同種であり、又特殊の利害関係にある隣邦支那国民と、共に相連携して、速に之が実現に取り掛かる事である⁽¹²⁾」。

しかし、如何に両国が唇齒輔車の関係にあると強調しても、現実の中国では排日の動きが見られた。こうした傾向を前提としつつ、両国の提携の可能性を言うためには責任を他者に転嫁することが必要となる。その代表的な事例は、排日運動が英米の教唆に因るものだとする論理の提示である。曰く、「不幸にして支那近來の行動は頗る寒心すべきものがある。英米人、特に米国人の先導に乗せられて頻りに我国に反抗し、国権回復運動などに熱中してをる⁽¹³⁾」。そのため、日本が聯盟を実現させるには、先ず「沈淪若しくは紛乱の状態にある」中国の自覚を促して現状から救済することが必要だとされるのである。このような主張が、中国を初めとするアジア諸国も日本の反米感情を理解し共有してくれるであろうという、一方面的思い込みを反映したものであったことは明らかであろう。

この時期のアジア主義は、極めて政治的な意図を以って論じられているのであるが、同時にそこには文化的な

内実を持たせようとする傾向も見られた。それは、政治経済的な発展の度合を異にする国々を「アジア」という枠で束ねるには、極めて緩やかな文化的近接性を持ち出すことが有効であったからである。その際に引き合いに出されるのは、アジア⇨精神文明⇨ヨーロッパ⇨物質文明という構図であり、そこでは通常、後者の害悪と没落、そして前者の再興が訴えられる傾向にあった。しかし、再建されるべきアジア文明の本質やその方法については曖昧なものが多く、先に触れた大石の論説のように儒家道徳を念頭に置く者から、仏教や日本主義を持ち出す者まで様々であった。その中で、極端な事例としては次のような言説がある。それによれば、白人文化を一貫するものは個人主義的経済主義であるが、黄人文化を貫流するのは民族主義的人道主義である。「しかしながら、この民族主義は、黄人文化を組織すると言つても、嚴格に言へば日本文化を形成するものである。『しかしながら、に発達進化した文化である』⁽¹⁴⁾。ここから、白人文化の打倒に先立ち、日本文化を全アジア民族の間に普及させ、その大同団結を図らなければならぬとされるのである。ここには、政治的盟主意識が文化の名を借りて濃厚に現れていることを窺い知ることができるのである。

次に、大アジア主義に批判的な意見を取り上げることにする。アジア主義を「所詮見込みが無い」として、アメリカの排日問題との関連でこれを論じることは愚の極みであつて「大局に通ぜざる盲者の所見」と断じたのは志賀重昂である。⁽¹⁵⁾彼の所説によれば、日本が提携すべき相手は中国以外にないのであるが、現在の中国では排日運動が盛んである。その最大の原因は、日本人がこれまで中国人に対して徳に欠ける行動を取つて来たことにある。日本人はこのことを反省し、相手を尊敬する姿勢を見せる必要があると言ふのである。しかし他方で、彼は日本と中国を除くアジア人は乞食まで成り下がっていると述べ、乞食の如きアジア諸国とは関わりを持つべきではなく、従つて大アジア主義の提唱なども無意味であると論じていた。⁽¹⁶⁾即ち、彼が大アジア主義を「見込みがない」とするのは、中国以外の地域の民を怠惰であるとして彼らとの提携の不可能さを根拠とするものであつて、

それが日本の優越性と表裏をなすものであったことは明らかであった。

これに対して、「抑も人種の觀念の如く不精密なる無し」として、「日本人と支那人とは同人種なりや、朝鮮人とは如何、馬來人とは如何⁽¹⁷⁾」と指摘する論説もあった。論者によれば、古来人種戦争というものはあったためしはなく、争いの原因となったものは全て利害関係であった。現に、人種を同じくする民族同士でも敵対関係にある場合も多く見られるのである。著者によれば、確かにアメリカの排日行為は遺憾なことであるが、それは一部の政治家の偏見と利己心とに基づくものであって、アメリカの世論の然らしめるところではない。日本人は、正義人道という「主張を為すに当りては人種の別利害の差を眼中に措くべきにあらず。説を同じうするものは黄色人種可なり白色人種可なり⁽¹⁸⁾」として、アジア主義を唱えることの問題を指摘したのである。また、アイヌなどの少数民族や朝鮮人に対する差別心を持つ日本人が、果してアメリカの排日に対して正義を口にしてアジア主義を主張する資格があるのかという意見もあった。⁽¹⁹⁾ こうした意見はいずれも理性的なものであり、今日からすれば貴重なものであったと言えることができる。しかし、こうした反対論は熱狂的な反米意識に基づいた大アジア主義の叫びの中では、大きな影響力を持つことはなかったと考えられる。

さて、『日本及日本人』特集号には植民地支配下の朝鮮人を含む三名の外国人の意見が掲載された。先ず、インド独立の闘士ビハリ・ボースは、日本人もアジア人であることを前提として、「有色人種を圧倒せんとする白人の脅威から免れんが為めには、全亜細亞人の団結が必要である⁽²⁰⁾」とする立場から大アジア主義に賛意を示した。これに対して、朝鮮人文学者である鄭然圭は、白人による有色人種排斥を非としながらも、有色人種の中にも排他心、優越感、征服欲等によって他者を排斥する者がいることを指摘する。それは具体的には日本を指しているのであって、もし日本が有色人種の先進国たるとするなら、アジア人を敵に回すような政策を取るべきではないとして、日本のアジア主義を批判したのである。⁽²¹⁾ だが、より直截的に日本論壇のアジア主義を批判したのは中

国人の殷汝耕であった。中国国民党員としての彼の批判は、後に見る孫文の当時のアジア主義言説との関連で興味深いものがあるので、ここでその概要を見ておくことにしよう。

殷汝耕は、日本で論じられている大アジア主義を二つの観点から解釈し検討を加える。第一は、文化という観点から解釈した場合である。確かに、西洋人から圧迫されて来たことへの復讐として、被圧迫民族を糾合し反撃することは、如何にも道理らしく痛快でもあるし、そうしたことで勝利を収めることもできるかもしれない。しかし、そこで武器にするという東洋文化は、実はそのような殺伐な思想を種子として発達して来たのではない。その基本とするところでは、国に華夷、洋に東西、人に黄白の区別はない。そのため、境域をアジアに限り、その民族が結束して他の民族に敵対すべしと説くが如きは、東洋思想の叛逆者に等しい。もし武器が必要だとすれば、それは世界大同主義であり万物同胞主義に外ならないと言うのである。⁽²²⁾

第二は、大アジア主義を国際的地位や経済生活等の見地から論じた場合である。殷汝耕は以下のように述べる。アジアの諸民族が白人から不平等な差別を受けて来たことは確かであるが、もし不平等の是正を目的とするなら、アフリカ人やアメリカ・インディアンをも包含するような有色人種全体の大聯盟を構想すべきである。それができないのなら、潔く「大アジア主義」という大看板を外して応分の看板に替えるべきである。その「応分の看板」として最も時宜に適ったものは「日支提携論」である。⁽²³⁾これが自然であって、大アジア主義なるものは本質的にも便宜的にも成り立たないのである。このように、殷汝耕は日本の大アジア主義を批判しつつも、日中両国の提携の必要性は強く認めていた。しかし、日本を信頼すべきパートナーと認めていた訳ではない。むしろ、日本は対露戦勝後の驕慢さを反省し、謙虚となり、自らをアジアの盟主と見なすが如き態度を改めることが、日中関係改善の第一歩であると考えていたのである。

殷汝耕の主張はまさに正論であり、当時の国民党の見解を代表するものの一つと見ることもできよう。ただ

我々は、それが中国革命の成就に最終的な責任を負わない者の言説であることを念頭に置く必要があるだろう。後に見るように、国民党総理としての孫文が彼と異なった言説を提示する原因はそこにあるのである。

以上において、一九二四年時点での日本論壇におけるアジア主義に関する言説を概観してきた。当時の日本の論壇は、自分たちが一等国になったと思いついたにも拘らず、実は欧米からそのような認められていなかったことを思い知らされ、アジア諸国を自らの周囲に巻込んで欧米に立ち向かうことの正義を訴えるという言説が多数を占める状態にあったのである。孫文は、このような環境にある日本をこの年の十一月に訪問することになるのであるが、日本での彼のアジア主義に関わる言説を検討するに先立ち、次章において一九二〇年代半ばまでの彼の対日観の変化について見ておくことにしよう。

第二章 一九二〇年代半ばまでの孫文の対日観

孫文の対日観の変遷については、これまで多くの研究がなされてきた。一部には、孫文が一九一九年に至って対日観を大きく変化させて、親日から反日に転じたとする解釈があったが、実際にはそのように単純には断定できないことが一九二〇年代初頭の彼の言動から確認される。その幾つかの例を挙げるなら、孫文は二三年四月に、旅大回収運動を行っていた学生運動の指導者に向かって、反日運動よりも北京政府の打倒を優先すべきであると述べていた⁽²⁴⁾。また、同じ頃に広東を訪ねた鶴見祐輔との会談で、孫文は日本の列強追随外交を強く批判するにも拘らず、一方では「東洋の擁護者」としての日本の役割を評価している。このことは、彼が採用しつつあった連ソ政策が、決して日本への反感と対になっていただけではなかったことを示している。また彼は、「露西亜と同盟することよりも、日本を盟主として、東洋民族の復興を図ることが、我々の望みである」⁽²⁵⁾と述べていた。そし

て、この時の会談で孫文は、人種抗争の延長上に大戦争が到来しつつある旨を述べており、これらのことは以前からの彼のアジア主義の構成要素が持続していたことを示しているかのようである。

孫文からの日中提携の呼び掛けは、一九二三年一月一六日に発せられた犬養毅宛の書簡の中にも現れている。この書簡は、日本での山本内閣成立によって犬養が逋信大臣として入閣したことを受けて、「これまでの日本の失政と列強盲従の主張とを、かならずや一掃して白紙に返し、中国の革命事業に最大の力を入れられる」ことを期待して書かれたものであった。ある人物によれば、これは民国初年に孫文が桂太郎に寄せた日中提携によるアジア解放という希望を、今度は犬養に期待したものと「言われている」⁽²⁷⁾。然るに、この書簡で特徴的なことは、日本に中国革命への援助を求めることに加え、率先してソ連を承認するよう求めていることである。⁽²⁸⁾これは孫文による日中ソ三国の提携構想の提示と言うべきものであり、これを当時の英米提携の強化に伴う日本の国際的孤立化の中での焦燥感を適確に捉えたものとし、日本にワシントン体制からの離脱という外交政策の根本的転換を求めたものとする見方は、⁽²⁹⁾当を得たものと言いうことができるであろう。

犬養毅宛の書簡には、日本が将来「被抑圧者の友となるか、それとも被抑圧者の敵となるか」と述べた箇所がある。⁽³⁰⁾これを、後の「大アジア主義」講演の中の「覇道の番犬」と「王道の干城」に相当する部分と見ることは決して誤りではない。しかし、これを以って孫文における「黄白人種闘争観」の完全な否定とする見方⁽³¹⁾には問題がある。と言うのは、翌一九二四年四月における日本人記者とのインタビューで、孫文はアメリカ上院での排日法案通過を、「日本においては最善の教訓であって、黄色人種の覚醒のための絶好の機会である」として、日本はこの際一步引き下がってアジア民族の大結合を図り、黄色人種の団結が完成する日を待つて、この度の屈辱に對する方策を講ずべきであると述べていたからである。⁽³²⁾ここには明らかに人種的な発想が窺えるのである。

ところで、前章で見たような、当時の日本でのアジア主義の再燃という事態に対して、孫文はどのように見て

いたのであろうか。前出の日本人記者と同一と思しき人物による別の記事には次のように述べられている。

今回米国の排日には日本は深刻な教訓を受けた筈である、輿論が沸騰し各種運動が行はれてゐると聞くも今の際日本として最後の手段に訴へる力も勇氣もあるまいが此屈辱を雪がんとせば亜細亜民族の大同団結に留意し其力に依頼するの外ない。⁽³³⁾

しかし、孫文は四カ月後に書かれた文章の中で、「アジア人種の大団結を唱える論がようやく盛り上がり、アジア人は、これに感動している」⁽³⁴⁾と述べてつも、大震災以来の日本での中国人労働者排斥という事実と照らし合わせた時、アジア人種団結の議論の真意が奈辺に在るのかとの疑問を呈していた。⁽³⁵⁾このことは、孫文が日本の論壇の動向についての情報を得ていたこと、そして、それが自らの考えるアジア主義と異質のものであると認識していたことを示している。

さて、一九二四年九月、孫文は広東軍政府の総参謀長である李烈鈞を特使として日本に派遣した。李は九月二四日香港を出発し、上海を経由して日本に渡り、一〇月三日に東京に入り、翌月一〇日まで日本に滞在した。先行して来日していた殷汝耕が孫文の指示によるものかどうかは判然としないが、李烈鈞の訪日に関しては既に六月頃から日本のマスコミが取り上げており、その目的は孫文の「東方同盟」⁽³⁶⁾の結成の意向を日本に伝えると同時に、財政的支援を求めることにあると報じられていた。⁽³⁶⁾また、当時の中国共産党の出版物でも、李の派遣は日中ソを構成国とする「東方同盟」運動を開始することに主眼があると見られていた。⁽³⁷⁾果して、日本滞在中の李の数回の講演と談話を分析すると、その目的の一つに、孫文の考えるアジア主義を宣伝してアジア大同盟を結成することがあったことが確認されるのである。その具体的内容は、これまでの経緯から推測すれば、従来の日中提携論に、ソ連との提携を加えたものと見るのが最も妥当なところであろう。⁽³⁸⁾そして、直面する内政問題では反直三角同盟への理解と支持の獲得であったと考えられる。

李烈鈞は日本滞在中の四〇数日間、政府・軍部の要人との会談を重ねた。しかし、結果として、日本側は彼の主張——それは孫文の考えの代弁であった——に好意的に対応することはなかった。そのため、李は一〇月半ばに孫文に帰国を申し入れたのであるが、孫文は彼に訓電を送って次のように述べた。

貴兄は日本朝野の士と連絡をとり、アジア大同盟をおこして白色人種の侵略に抵抗せんがために派遣されて日本に駐在している。長期にわたって駐在し、この旨を宣伝する任務がある。突然いま帰国して復命したいとの要請であるが、思うに、かの日本政府は鼯のごとく小胆であり、われわれの大アジア主義を敢えて受け入れはしまい。しからば、貴兄は勝手に日本を離れるべきではなく、長期駐留して積極的に宣伝すべきである。（そして）かならず日本政府が貴兄に対して国外退去の命令をはっきりくだすのを待つて帰国されよ。そうしてこそはじめて日本の正体をあばくことができるのである。⁽³⁹⁾

ここで孫文が言う「アジア大同盟」（原文では亜洲大同盟）が先の「東方同盟」と同じであるとすれば、それは日中ソの提携を念頭に置いたもので、しかも人種主義を否定したものではなかったことが理解される。孫文の中では、連ソ政策の採用と日中提携は決して二者択一的なものではなく、併存可能なものであったと見るべきである。そして、ここで孫文が言う「われわれの大アジア主義」（原文では「吾人之大亜細亜主義」）が、当時の日本の論壇で唱えられている言説に対置されたものであったことは明らかである。だが、そこにアジアに対する主体的な連帯の意志が込められていたことは確認できず、それは依然として中国革命への協力を得ることを目的としたアジア主義でしかなかったように見えるのである。しかし、この訓電で孫文は、そのような内容を持つ「われわれの大アジア主義」が結局は日本政府に受け入れられないだろうと見ていた。そうだとすれば、この時の孫文は殆ど実現不可能な提案を李烈鈞に行なわせていたことになるのだが、彼が唯一期待をかけたものがあつたとすれば、それは在野の政治家、財界人、民間の運動家たちが中心となつて世論を高揚させることであつたであ

ろう。そのことが、孫文の最後の訪日へと繋がったのである。

一〇月二三日、北京政変が発生し、十一月一日には馮玉祥、胡景翼らが孫文に北上を要請する旨を打電した。これを受けて、孫文は北方の同志の歓迎に応えるべく北京に行くことを決断し、一〇日には「北上宣言」を発した。そして彼は、北京において国民会議を召集した後に主義を宣伝し、団体を組織し、党務を拡充することによって、遠くない将来に三民主義と五権憲法の実現を図ることができると述べたのである。⁽⁴¹⁾ 一七日、孫文は上海に到着し、当地で日本訪問を決意することになる。帰国して間もない李烈鈞の勧めがそのきっかけとなった。即ち、孫文から北上についての意見を求められた李が、一旦日本に渡って、頭山滿、犬養毅、宮崎滔天、床次竹次郎らと会談することが北京での交渉に有益であることを説いたのである。⁽⁴²⁾ このことは、孫文の日本訪問が反直三角同盟への支持獲得という内政問題に関っていたことを明確に示しているのである。

そして二一日、孫文は上海を出発するにあたり、日本のマスコミに向けて次のような声明書を発表した。⁽⁴³⁾ やや長くなるが以下に示しておく。

今回余の日本訪問は天津會議に赴くに先ち日本に於ける旧知を訪ひ且つ多数朝野の方々と会見し隔意なき意見の交換を行はうとするにある、現在の支那は將に統一の緒に就かうとする重大な時機に遭遇してゐるのであつて如何にして之を達成するかは識者の大いに考慮を要する所である、今や支那の問題は独り支那一國の問題でなく實に世界の問題として重大視されてゐるのであるが余はこの時局に処するにはどうしても日本と提携せねば不可能であることを痛感してゐる、而してソハ単に外交辭令の日支提携ではなく、日支両國民眞の了解の下に支那を救ひ東亞の平和を確立せしめると共に黃色人種の團結を固くし以て列國の不法な圧迫に対抗せねばならぬ、これがためには日本朝野がこの時局に対して如何なる意見を有してゐるか、又今後如何なる方針をとらんとするかについて日本朝野の意見を聞き以て支那の時局收拾に資せんと欲する、一部では余が日本に対して廿一箇条の撤廃、遼東半島還附の意志を有してゐると伝ふるものがあるやうであるが現在における余は未だこれらの問題に対して何等具體的の考を有してゐない。⁽⁴⁴⁾

最後の不平等条約撤廃等の問題について、孫文は最終的に国民会議を開催して国論を聞いた後に最終決定することを付け加えているが、既に見たように、孫文は北京政府の打倒のためには学生たちの反日運動を抑制する姿勢を見せていた。従って、ここではまだ明言を避けているとは言え、日本に譲歩してでも支持を得て、英米を後ろ楯とする直隸派を壊滅に追い込みたいと望む姿勢が見てとれるのである。しかも当時、張作霖とソ連との間に密接な関係ができていたことからすれば、ソ連もまた内政問題処理のための有力な一つのファクターとなり得るものであった。⁽⁴⁵⁾かくして、孫文の日中ソ提携論は当時の内政問題を直接的に反映したものであったことが理解されるのである。翌二二日、孫文は船内でのインタビューに答えて、今後もし日本が列強の侵略や共同管理といった行動に追随せずに、中国に野心を持たないことを表明すれば、中国国民の疑念は払拭されるであろうと述べた。⁽⁴⁶⁾孫文は前年からこの年にかけての関余問題、商団事件に際しての日本の姿勢が広東政府に好意的なものを見ており、こうした方針が今後も継続されることを期待したのであった。

以上のことから、一九二〇年代半ばまでの孫文にあつては、日本への期待と不信感が併存していたものの、基本的には従来からの日中提携論が持続していたことが理解される。そこでは人種論も消滅することはなかった。そのような対外姿勢に変化があったとすれば、そこにソ連との提携が加わったことである。それは、言うまでもなく彼の連ソ政策の採用に起因するものであった。だが、日中ソの提携が可能となるためには、日本のソ連承認が是非とも必要となる。李烈鈞の日本派遣はそのための宣伝工作に目的があった。孫文はこのような新たな方針を、日本の論壇におけるアジア主義と区別すべく「われわれの大アジア主義」と称したのである。しかし、一九一〇年代の場合と同様に、孫文は自らの外交思想を恒常的に「アジア主義」という名称によって表現していた訳ではない。加えて、彼がアジア主義という言説を使う時、それは殆どが中国革命の完成という目標に向けた国際戦略を内実としており、そこに中国以外のアジア諸国の解放ということが視野に入っていたとは言えないのであ

る。このように自国の革命を最優先課題とする孫文が、自身の提起した日中ソ提携論が持つ客観的意味をどれほど理解していたかは不明である。しかし、この構想の展開され方の如何によつては、国際システム変更の構想へと展開する可能性を秘めていたのである。

第三章 日本滞在中の孫文

孫文は一月二三日に長崎に到着した。船内でのインタビューで孫文は、広東政府とソ連との関係について触れ、ロシア革命を高く評価しつつも両国の制度と国情が異なることを強調した。そして、日本の対中国政策については、中国革命が明治維新の道を歩もうとしているにも拘らず、富強を実現した日本は中国に同情心を持つてくれないと批判する一方、この点で中国革命の挫折に同情してくれるソ連には親近感を覚えると述べた。そして、最も興味深いことは、ここで孫文が次のような言葉によつてアジア連盟の結成に期待を示していることである。

将来日本ハ亜細亜民族連盟ノ覇者トナリ欧米ニ対抗スヘク亜細亜全体ヲ連結シ亜細亜ノ独立ヲ図リ以テ欧州ノ羈絆ヲ脱スル様努メサル可カラス亦日本ハ須ラク労働露国ヲ速カニ承認スヘシ。

ここでは、「亜細亜全体」が何処までを指すのかは明らかではないが、この時点では少なくとも日中ソの提携による列強への抵抗が考えられているにも拘らず、日本をアジアの盟主として認めるといふ点では前年の鶴見祐輔との会見内容の延長線上にあると言える。同じ日、中国人留学生代表を前にした演説で孫文は、日本が中国を支援して不平等条約の廃棄に協力すべきであるとし、日本がその事業に貢献してくれたなら、「現在の小さな権益ではなく、将来、より大きな権利を得る」ことになると言うだろうと説いた。ここには、大義を説くと同時に、現実的利害を重んじる孫文の特徴が出ていると言わなければならない。

孫文は二四日神戸に到着した。当日の記者会見において、孫文はこの度の訪日の目的が「政治的及其ノ他何等ノ意味ヲ有セス」として、天津での会議に赴くに当たつての交通事情によると述べたが、⁽⁴⁹⁾ 実際は先に見たようにこれは計画的な行動であつた。そして、彼は「東京ニハ赴カサル考ナリ」とも述べているが、これも実際には上京の意図はあつたものの、東京での殷汝耕による日本外務省当局との事前交渉が不調に終つたことを踏まえての発言であつた。⁽⁵⁰⁾ この時の会見で、孫文は中国の統一と内政の安定を妨げているのは偏に不平等条約を利用した外国人が利権を求めて軍閥を使喚するためであるとし、諸悪の根源であるこの不平等条約の撤廃のために助力してくれる国は日本だけであると述べた。⁽⁵¹⁾

それでは、このような意図を持つて来日した孫文に対して、日本の世論はどのような対応をしたであろうか。管見の限りでは、孫文の訪日の意思を汲み、これに好意的な反応をしたものは極めて少なく、むしろ批判的なものが多く見られた。例えば、一月二四日の『大阪毎日新聞』に掲載された論説記事では、孫文が余りにも理想主義的であつて、現実に疎いと批判し、彼が「広東一省に於てすら其理想を実現することの出来なかつたことを思ふ時、支那全土に対する理想実現の如何に困難であるかは多くを言ふを要しない」と述べ、「急進主義と露骨なる排外主義の危険を警告せざるを得ぬ」と述べていた。⁽⁵²⁾

また、二五日の『東京日日新聞』の論説では、「日本の対支態度は、その特殊利権の侵されなかり、絶対不干渉主義であるから、折角の来訪に接しても、格別のおみやげがありさうに思はれない」として、孫文の日本訪問に極めて冷淡な姿勢を示した。そして、この記事は、孫文はこの度の北上が国民の意思を代表するものだと言うが、それは全くの思ひ上がりであつて、広東一省の経験が全国に通用するはずはないと批判し、更には孫文の革命理論自体に大きな問題があるとして次のように述べている。

われ等は孫氏が真に右文の政治家として、母国のためにその後半生を献げんとするならば、すべからくまづその露国式

の社会革命論や、古の攘夷論に彷彿たる英米に対する態度をあらため、まづ内に支那及びその人民を正視せねばならぬ。氏が絶えず口にする三民主義や五権憲法は、広東大学における講演の題材としては格別、目睫の急にせまつてをる支那の国難を匡救する上に、何等の価値あるものではない。⁽⁵³⁾

結局この記事は、日本の国益のためには中国の内政の安定が最も重要であるという、当時の国内の意見を代表したものであり、そのためには孫文は決して革命的政策を貫徹することなく、「中庸」の精神を以って会議に臨むことを求めたのであった。

他方、孫文来日の目的について、「日支親善」「日支提携」の立場から評価するものも見られた。例えば、一月二八日の『神戸又新日報』の記事では、孫文の訪日の目的が「日支提携を以てその第一義となし、斯て西力東漸の潮流を遮断するといふ点にある」とし、「支那新政府の対外政策としては、先づ以て日支提携に始まるの必須事に属する所以を、吾輩は勢ひ強調せずにはゐられない」と論じている。⁽⁵⁴⁾一見して、この記事は孫文に好意的なものに映る。しかし実際には、この記事の「日支提携」への期待は段祺瑞政権に向けられたものであって、「極端な偏理家」であり「変通に乏しき迂闊政治家」である孫文には、日本を訪問して各方面の意見を聞き、従来の反帝国主義的姿勢を改めることに「衷心喜悅の情」を寄せているのである。

以上のように、孫文の訪日に当つての日本のマスコミの冷淡さは、当時の論壇に沸き立つアジア主義の言説とは全く無縁であるかの様相を呈している。このことは少なくとも二つのことを示しているように思える。即ち第一には、孫文は李烈鈞を派遣して宣伝工作を行なわせたにも拘らず、「われわれの大アジア主義」を日本の論壇及びマスコミ界に認知させることができずにいたことである。孫文は中国革命の完成を直接の目標として、それを妨害する欧米列強と対抗すべく人種論と日中提携論を唱え、それを「アジア主義」と称していたのであるが、日本のマスコミで孫文の主張を講演以前にアジア主義との関連で論じたものは皆無であった。第二は、これと表

裏することであるが、日本の論壇におけるアジア主義言説の多くは、中国が現状を大きく変えない形で統一を達成することが前提で、その上で日本が盟主となってモンロー主義を実行するというものであった。それ故、孫文の唱える不平等条約の撤廃という要求は、日本の既得権益にも関わる重大な問題を含むものであって、論壇の大多数が考えるアジア主義とは相容れるものではなかった。極言すれば、当時の孫文は、日本が列強に対抗していくために提携し得るパートナーとは見なされていなかったのである。

さて、孫文は上海出発前には日本の要人との会談を計画していたが、日本人側が不熱心であるとの情報が既に彼のもとに伝わっており、実際その目的は不調に終わった。「東亜ノ大局ニツキ懇談シタシ」と来神を求められた渋沢栄一は病気を理由に面会を断った。⁽⁵⁶⁾犬養毅は代理人として古島一雄を派遣したに止まった。そうした中で、独り神戸の孫文に面会に訪れたのが国権主義的アジア主義者として知られる頭山満であった。この時、孫文が頭山に不平等条約廃棄の主張への支持を求めていることは明らかである。現に頭山の態度如何によつては、政界の動向が変化を来すことも十分予想された。しかし、国権派アジア主義者の間では満州問題の処理の仕方が懸念された。そこで、黒竜会の内田良平は事前に頭山に対して、「満州問題については、確りと一本釘を打ってもらいたい」と熱心に勧告していたのである。⁽⁵⁷⁾

孫文と頭山の会談は二五日と二六日に行なわれたが、二五日の会談で孫文は中国が曾て諸外国との間に結んだ旧条約を全て撤廃したい旨を述べた。これに対して頭山は、満州の特殊権益は、将来中国の国情が改善され、他国の侵害を受ける心配がなくなった場合は還付されるべきであるが、「目下オイソレと還附の要求に應ずるが如きは、我が国民の大多数が之を承知しないであらう」と述べた。⁽⁵⁸⁾翌日の会談では、頭山の門下生である藤本尚則らが満蒙の既得権益、具体的には旅大回収問題についての考えを質した。孫文はこれに答えて、「旅順大連の回収等といふ所まで考えてはゐない」とし、この問題が「現在出来上つて居る以上に、更に其勢力が拡大する場合

は問題になるが、今の通りの勢力が維持される以上、問題の起ることは⁽⁵⁹⁾ない」と述べ、現状維持の姿勢を示したのである。

この時の頭山の発言が、孫文の不平等条約撤廃の内容を治外法権の撤廃と関税自主権のみに限定させる効果があったと見ることも可能である。しかし、孫文は前年四月に旅大回収闘争を抑制しても日本との関係を繋ぎ留めておこうとする立場を示していた。このことからすれば、孫文は頭山との会談で日本の世論の瀬踏みを行ない、以前から設定していた最大限の譲歩ラインを確認したものと言えるであろう。そうだとすれば、孫文は日本の論壇のアジア主義にネガティブに対応して来ながらも、結果的には日本からの支持獲得という目的のために、当の日本のアジア主義者から自らの対日要求の範囲を設定してしまったということになるだろう。

さて、我々は次に孫文が神戸で行なった最大の行事である「大アジア主義」講演について検討して行かなければならない。

孫文の「大アジア主義」講演は、一月二五日における西川莊三神戸商業会議所会頭との会談で決定されたものである。当初予定された演題は「大亜細亜問題」であった。ここでは一つの疑問が生じて来るだろう。それは、当時の日本の政界やマスコミの多くが孫文の来日に冷淡な姿勢を取っていたにも拘らず、何故このような演題が用意されたのかということである。これには多分に当時の神戸が抱えていた問題が関っていた。即ち、神戸の経済界は、それまで首位を占めていたアメリカとの輸出入総額が大幅に減少したため、中国へと目を向けたにも拘らず、その中国市場がアメリカによって奪われてしまうのではないかという危機感を抱いていた。ここに、「大亜細亜問題」の名の下に、アメリカを排除して中国における日本の地位を確立し、経済繁栄の基礎を築こうとする論理が潜んでいた。⁽⁶⁰⁾言わば、実業家の経済の論理が、孫文の言説を利用しようとしたと言えるのである。

もちろん、この申し出は孫文にとっても都合だったはずである。日本到着後、彼は中国人に対する講演を行

なったものの、日本人に向けてのものは予定されていなかったからである。来日以後、孫文の講演の主たる内容は内政と不平等条約問題についてであり、「アジア主義」言説は全く現れていなかった。然るに、彼はこの時点から「アジア主義者」としての扱いを受けることとなる。例えば、後援団体の一つである『神戸又新日報』の社告では、孫文を「東亜聯盟の唱首であり、日支親善の楔子」と称し、読者に対しては「日支親善と亜細亜民族の聯盟に向つて」進むことを呼び掛けたのである。⁽⁶¹⁾

一月二八日に行なわれた講演の内容については、既に多くの書物や論文で紹介されているので、ここではその概略だけを述べておくに留める。

孫文は先ず、衰退しているアジアの中で復興の先駆けとなったのは日本による欧米との不平等条約の改正であったとする。このことは他の諸国に大きな希望を与えることになった。その後の日露戦争での勝利は、ヨーロッパに対するアジア民族の最初の勝利であり、これに刺激を受けてアジア各地の独立運動が盛んになって来た。そうした中で、アジアの民族間の連帯の感情の高まりが見られるが、東アジアにおいては日本と中国が独立運動の原動力となり得る力を持っているため、互いに提携する必要があるのである。以上の文脈で、孫文は中国と列強との間の治外法権などを含む不平等条約撤廃については直接言及していないものの、日本の過去の事例を引き合いにすることによって暗にそのことを日本に求め、それが将来の提携の前提であると述べていたのである。

次いで、孫文は東西文化の優劣の比較を行なう。彼の説く所では、東洋の文化は仁義道德を主張する王道であり、西洋文化は功利と強権を主張する霸道であるが、両者を比較してみた場合、明らかに前者が優っている。そして、この仁義道德の王道文化こそが「大アジア主義」の基礎となるものであった。即ち、「われわれが『大アジア主義』をとえ、アジア民族の地位を回復するには、仁義、道德を基礎として、各地の民族を連合するよりほかになく、そうすれば全アジアの民族は、ひじょうに大きな勢力を擁する」ことになるのである。⁽⁶²⁾

た、孫文は連合の中に西洋の覇道と対立するソ連をも加えるべきだとしているが、これは言うまでもなく当時の連ソ政策をアジア主義に取り込んだものであった。

さて、この講演は「大アジア主義」という名称を冠しているにも拘らず、当時の孫文は既にアジア主義から離れていたとする見方がある。これによれば、孫文の連ソ政策の採用と、世界的規模における被抑圧民族の解放の主張がその根拠であるとされる。⁽⁶³⁾だが、この説が成り立つとすれば、孫文の外交思想における人種闘争論に替わる抑圧民族对被抑圧民族という普遍的な民族解放理論の確立、そして日中提携論の消滅が証明されなければならないだろう。先ず、前者について言うならば、確かに講演では黃禍論に触れた箇所はあるものの、それは人種対立を肯定的に論じたものではなく、従来の黃白人種闘争観は消滅したかに見える。しかし、それはソ連との提携という政策を踏まえたものであって、現実を優先させた結果であったと考えられる。それ故、人種闘争論についての明確な否定の言辞は見られないのである。それでは、孫文は反帝国主義の立場から被抑圧民族の解放を求め、それを基軸として国際的な連帯を志向したのであろうか。以下の一文は、そうした傾向を強く示唆しているかのような印象を与える。

われわれが「大アジア主義」をとえ、研究した結論はというと、いったいどんな問題を解決しなければならないのか。それは、アジアの苦痛をうけている民族のために、どうすれば、ヨーロッパの強大な民族に抵抗できるか、という問題であります。簡単にいえば、被圧迫民族のために不平等を打破しなければならぬという問題であります。⁽⁶⁴⁾

しかし、講演全体を見た場合、ヨーロッパの列強に対置された中国と他の被抑圧民族が対等の立場に置かれていたのかと言えば、それは極めて疑問である。そのことを最も顕著に現しているのは、ネパールが尚も中国を宗主国として仰ぎ続けているとして、それを理想的な国家関係としている箇所である。孫文はこれを王道文化が典型的に現れた事例であるとしているのであるが、このことは、冊封体制下の宗藩関係が近代的国際政治秩序にお

ける「抑圧―被抑圧」関係に優ると述べているに等しい。そうであるとすれば、そこには中国と他の被抑圧民族とが平等の関係で連帯する可能性は生じ得ないであろう。そして、中国革命の勝利という最大の目標を実現するに当って、他の被抑圧民族との連帯、或いは彼らからの支持の獲得が果して何らかの利益をもたらすか否かは自明のことであつたし、自国の革命勝利前に他国の独立を支援するなどといったことが、孫文の想定するものであつたとは思えない。こうしたことからすれば、孫文の構想が、被抑圧民族を平等に遇する強国が中心となつて、中国のように潜在力の大きな国の独立を助け、その後更に多くの弱小民族の解放を実現することであつたとする説はかなりの説得力をもつものである。⁽⁶⁵⁾即ち、孫文の立場は自国の革命を優先した強国依存型の民族解放というものであり、反帝国主義に基づいたものではなかつたと言ふべきである。ソ連との提携はそうした考えに基づいたものであつたと判断すべきであらう。

それでは、日本に対する評価は如何なるものとなつたのか。そこで、第二の日中提携論の可能性についての孫文の見方が問題となつてくる。この問題でしばしば引き合いにだされるのが、講演の末尾の一節である。そこには次のように書かれてある。

あなたがた日本民族は、欧米の覇道の文化を取り入れていると同時に、アジアの王道文化の本質ももっています、日本がこれからのち、世界の文化の前途に対して、いったい西洋の覇道の番犬となるのか、東洋の王道の干城となるのか、あなたがた日本国民がよく考え、慎重に選ぶことにかかつています。⁽⁶⁶⁾

この部分を含めて全体を常識的に読めば、講演の主旨が日本との三〇年に及ぶ関係を孫文自らが総括し、そして自らの手で葬るための訣別の言葉であつたと見ることも可能であるし、以前はそのような見方が主流であつた。しかし、実際にはこの部分は日本の新聞に掲載された講演記録では欠落していた。この欠落問題に関しては、孫文自身の自主規制に由るものとする説を始め、実際は述べたが通訳の戴季陶がこれを敢えて翻訳しなかつた、或

いは新聞社側が検閲を恐れて掲載しなかった等の解釈がなされて来た。⁽⁶⁷⁾これらの諸説のうち、最後の新聞社の自主規制ということは先ずあり得ない。何故なら、およそ講演の重要なポイントを外すとは考えられない、当日の兵庫県知事から若槻礼次郎内務大臣に宛てた報告書に付された講演要旨にも、その部分は記載されていないからである。⁽⁶⁸⁾また、戴季陶が自らの判断で訳さなかったとも考えられない。そうだとすれば、孫文が帰国後に定本を作るに当って、当該部分を書き加えたとする説が最も可能性が高いと言わなければならない。

このように、「大アジア主義」講演の中で孫文が日本批判の象徴とも言うべき言辭を述べていなかったとすれば、この時点での彼は反日の姿勢を取っておらず、依然として日本に期待を抱いていた可能性がある。また、講演当日に某「支那浪人」と面会した際に彼が次のように語ったという記録がある。「今後、列強を放逐すると同時に）日本ヲ盟主トシテ亜細亞人ノ大同団結ヲ遂ケ以テ欧米ニ対抗スルコトハ急務中ノ急務ナルヲ以テ此ノ意味ニ就テ日本政府ノ了解ヲ求ムヘク来邦シタル次第ナルモ政府当局ヨリ東上ハ見合セヨトノコトナリシニ依リ神戸ニ滞在スルコトナリタルモノナリ」。⁽⁶⁹⁾仮にこの発言に信頼が置けるとすれば、日本を盟主とするということは空世辞の類いであるとしても、少なくとも来日までの孫文は、日本との提携によって列強に対抗しようとしていたことになり、日本を批判する意思はなかったことになる。むしろ、ここでは日中提携の方針に力点が置かれていたと見る方が妥当であろう。そのように考えた場合、この時点の孫文が考えた列強への抵抗の手段は依然として日中提携であり、そこにソ連を加えたものであったと考えられる。そして当然、中国革命もこの二国との提携によって達成されるものであったのである。しかし、政府当局から上京を拒まれたことが、孫文の大きな失望となったことは先の「支那浪人」の言からも窺い知ることができる。その意味では、来日以後の孫文の期待が政府から国民世論へと向けられるに至ったとする解釈は説得力を持つと言えよう。

以上のことから、「大アジア主義」講演について言えることは次のようなことである。先ず、孫文は被抑圧民

族の解放を述べてはいるが、それは必ずしも反帝国主義的立場に基づいてのものではなかったということである。そして、そこでは日本批判の姿勢も確認することができず、逆に日本に対する期待感が持続していたと理解する方が妥当であると考えられる。総じて、この講演は中国革命の達成を妨げている英米列強に抗すべく、日中ソの三国の提携を呼び掛けたものである。更に敷衍すれば、それはベルサイユ体制とワシントン体制から疎外されている国々を結集しようとするものであり、後に戴季陶によつて提唱される「大陸同盟説」の原点であると考えられる⁽⁷⁰⁾。この意味において、孫文の講演の主旨は、「大アジア主義」と銘打つものの、日本の論壇における受動的かつ日本主義に通ずるアジア主義と相容れるものではなかった。しかし、それはアジア民族の解放を言いながらも、孫文の考えの中には、彼らと同一の地平に立とうとする発想はなく、従来からの特徴である強国依存の傾向が持続していたと考えられるのである。

日本を離れ天津に到着した後のインタビューで、孫文は「目下日本は世界の三大強国と誇つてゐるけれども思想その他の方面において尽く欧米人の後塵を拝しつゝあるではないか、これは日本人が脚下の亜細亜を忘れてゐるためであつて日本はこの際速やかに亜細亜に帰らねばならぬ、而して第一着手に先づ露国を承認すべきだと思ふ⁽⁷¹⁾」と述べた。このことは、孫文が依然として日本への期待を捨てておらず、日中ソ三国の提携を望んでいたことを示していたのである。

おわりに

本稿では一九二〇年代半ばの日本論壇のアジア主義再燃を背景として、孫文が如何なる対外政策を展開したのかを踏まえ、「大アジア主義」講演の内容と特徴を検討して来た。本稿で明らかにされたのは以下の諸点である。

日本におけるアジア主義言説の再活発化は、アメリカの排日法案通過を契機とするものであったが、その内容は一九一〇年代のそれと殆ど変わるところはなく、むしろ「白人種憎し」という点では興奮の度合が一層高まったかのような印象を受けるものであった。この間の孫文の対外観を見ると、そこには以前と同様に日中提携の呼び掛けが持続していたが、新たにソ連との提携が加わり、日中ソ提携の構想が生じるに至った。また、孫文は当時の日本の論壇でのアジア主義再燃に対しては、アジア民族の団結の契機となることに若干の期待を見せたものの、その実態が結局は自らの考えるところと相容れないものであることを認識し、「われわれのアジア主義」を以ってそれに対置させようとしたのである。彼が殊更に揚言して、それとの対決姿勢を見せなかったのは、中国革命を最優先する政治的配慮によるものであったと考えられる。

神戸での「大アジア主義」講演とその前後の発言を見ると、そこには日中提携論が持続していたものと判断される。この点では、以前の傾向からの大きな転換はなかったと考えられる。また、孫文の従来のアジア主義の今一つの要素であった人種論は消滅したかに見えるが、それはソ連との提携の背後に隠れたと見るべきである。もし、「大アジア主義」講演に何らかの新しいさを見出すとすれば、それはソ連との提携を加えたことによって新たな国際システム創出の可能性を開いたということであろう。ただ、それも被抑圧民族の主体的抵抗と変革を基本に据えたものではなく、況してや曾て李大釗が唱えた「新アジア主義」と同次元で論じ得るようなものではなかったのである。総じて言えば、孫文の政治的生涯の中で唱えられたアジア主義とは、日本で生まれた「アジア主義」という言辞を以って、その時々彼の彼の外交姿勢を日本人に表明したものであって、その根底には常に中国革命への支援の要請が込められていたのである。その意味では、孫文のアジア主義は確固たる内実を伴わない、便宜的な概念として用いられていたと考えられるのである。

それでは、孫文の「大アジア主義」講演は日本でどのように受け止められたであろうか。幾つかの事例を挙げ

て、本稿の締め括りとすることにしよう。

当時の日本で、最も積極的にアジア主義を論じていた雑誌『日本及日本人』には、孫文の「大アジア主義」講演に好意的な記事が掲載された。それは、講演が過去の日本が独立を果たし「亜細亜の先覚」となったことと日本リーダーシップを示唆する箇所に言及し、これを「吾人の素論と符節を合するが如きものあり」と評価し、アジアはその本質に基づいた独創的文化を作るべきであって、欧米の文物に心酔しそれを謳歌することの非を説いたものであった。⁽⁷²⁾この論説は、日本型アジア主義の本流からの「断章取義」的な評価であったと言ってよい。

また、文明論と種族的観点から講演を評価するものもあった。例えば、『大阪毎日新聞』の記事は孫文の王道・霸道論を肯定的に捉え、問題は「向後吾等人類の永い生活において、いづれが最後の勝利者となるか」であるが、昨今のアジア民族の国家的自覚は将来を悲観するに及ばないとする有力なる証拠であると述べた。そして、アン・グロサクソン対アジア民族の対決が予想される将来に備えるためには、どうしても日本と中国の提携が必要であるとされたのである。⁽⁷³⁾こうした評価は、孫文の講演を日本のアジア主義と質を同じくするとの前提に立ったものであるが、果して孫文の真意を理解したものであったかは疑問である。

しかし、全体的に見れば、孫文の講演に対しては批判的な意見が多く見られた。先ず、矢野仁一は歴史学者の立場から、朝貢に関する歴史的事実を歪めて自説を開陳した孫文を、白昼人を欺くもので寸毫の価値もないと断言した。⁽⁷⁴⁾これを受けて、橘樸は孫文の王道思想が近代的国家観念とは相容れないものであるとし、孫文は「西洋勢力の下に呻いて居る弱小民族の不平と云ふ事と、亜細亜と云ふ一種の地理的観念とを非論理的に結び付けて居る嫌ひはないか」⁽⁷⁵⁾と批判した。そして、孫文が中国統一の先決問題として軍閥打破を選ばず、反帝国主義を優先させたことを不合理なものと批判していた。この時点での橘は、孫文の国際戦略が中国革命の達成とリンクするものであることを理解していなかったのである。この他、孫文の黄色人種同盟による白人種との対決の構想につ

いては理解をしつつも、彼の「理想家」的体質を以ってしては主権回復の実現は困難であるため、現実的立場から国内の統一と整頓、経済の発展を図るべきであるとする意見⁽⁷⁶⁾、また同じく内政優先の立場から、大アジア主義の主張は「六莒十菊」の譏りを免れず、革命のための手段としては「あまりに非時代的であり、空疎大葉」に過ぎるという批判がなされていた。⁽⁷⁷⁾

当時、孫文の戦略を最も適確に理解し、それを批判し得た人物は中野正剛であった。彼は、孫文の構想が「亜細亜を打て一丸となし、之に労働露西亞、独逸其他虐げられたる国々を聯ねて、世界の覇者英米兩國に対抗せんと」⁽⁷⁸⁾するものであるのに対し、「日本の大亜細亜主義者は亜細亜を聯ね、人種的色彩によりて白人に応戦し、日本を中心として白人の帝国主義に対抗すべく、別個の帝国主義を高調せんとする傾向がある」⁽⁷⁹⁾。このように、両者の間には大きな相違があるにも拘らず、孫文が日本のアジア主義者たちに期待をかけることは賢明な策ではないとされたのである。「支那人の支那」を前提に考える中野は、孫文と日本のアジア主義に対してバランスの取れた見方をしていた。しかし、こうした見方をする者は極めて少数であったと言わなければならない。多くの人には、孫文の「大アジア主義」講演が意図した日中ソの三国提携策は殆ど理解されていなかったのである。

- (1) 拙稿「初期アジア主義の政治史的考察——日本と中国の間——」、『中国研究論叢』第六号、近刊。
- (2) 藤井昇三氏は『孫文の研究』（勁草書房、一九六六年）以来、一貫して孫文が最終的に反日の立場に到達したと見なしている。
- (3) 鳥海靖「パリ講和会議における日本の立場——人種差別撤廃要求を中心に——」（『法政史学』第四六号、一九九四年三月）、一五頁。
- (4) 簗原俊洋『排日移民法と日米関係』、岩波書店、二〇〇二年、二三五頁。
- (5) 「米国の暴戾に対する全亜細亜民族的興奮」、『日本及日本人』第四七号、一九二四年五月一日、三一四頁。

- (6) 「眠れる大亜細亜の覚醒と白色侵略の拒否」、『日本及日本人』第四八号、一九二四年五月一日、五頁。
- (7) 大石正巳「アジア民族の総同盟を策せよ」、『太陽』第三〇巻七号、一九二四年六月一日、一〇九頁。
- (8) 岩出光隆「大亜細亜復興の経緯策」、『日本及日本人』第五〇号、一九二四年六月一日、九一一頁。
- (9) 稲葉君山「大亜細亜主義の障碍」、『外交時報』第四七〇号、一九二四年八月一日、八六頁。
- (10) 同前、九〇頁。
- (11) 大石正巳「大亜細亜主義の確立」、『日本及日本人』秋季増刊号、一九二四年一〇月五日、四頁。
- (12) 角猪之助「亜細亜主義と日本の対外政策」、同前、一二九頁。
- (13) 神谷卓男「亜細亜文明の改造」、同前、四四頁。
- (14) 斎藤澄雄「黄人文化の世界的光被を期せ」、同前、一五八頁。
- (15) 志賀重昂「見込み無き亜細亜聯盟」、同前、二六頁。
- (16) 同前、二九一三〇頁。
- (17) 市川源三「大亜細亜主義を排す」、同前、一〇二頁。
- (18) 同前、一〇三頁。
- (19) 小笹正人「寧ろ無価値なれ」、同前、一七三頁。
- (20) ラス・ビハリ・ボース「革命途上の印度」、同前、一九六頁。
- (21) 鄭然圭「黄色人種自覚の秋」、同前、八六頁。
- (22) 殷汝耕「大亜細亜主義とは何ぞや」、同前、六十七頁。
- (23) 同前、八一〇頁。
- (24) 「旅大回収運動ノ広東学生団代表ニ対スル孫文ノ訓示ニ関シ報告ノ件」(一九二三年四月三日)、外務省篇『日本外交文書』大正二年第二冊、日本国際協会、一九七九年、二四〇―二四二頁。
- (25) 鶴見祐輔「広東大本営の孫文」(『改造』一九二三年七月)、陳徳仁・安井三吉篇『孫文・講演「大アジア主義」資料集』、法律文化社、一九八九年、三二七頁。なお、このことに關して趙軍氏は「孫文が『日本を以て東洋民族の盟主とする』という思想を持っていたことの他者への初めての表明であると同時に、実は、この思想に対する清算

でもあった」(『大アジア主義と中国』、亜紀書房、一九九七年、二二〇―二二一頁)と述べているが、後の孫文の言説からすれば必ずしもそのように断言することはできない。

- (26) 孫文「犬養毅への書翰」(一九二三年一月一六日)、伊地智善繼・山口一郎篇『孫文選集』第三卷、社会思想社、一九八九年、三二五頁。

- (27) 古島一雄『老政治家の回想』、中央公論社、一九七五年、一一八頁。

- (28) 『犬養毅への書翰』、三二六頁。

- (29) 高綱博文「孫文《日中ソ提携論》の起源と形成——孫文『犬養毅宛書簡』(一九二三年)の歴史的背景」、『研究紀要』(日本大学通信教育部)第六・七合併号、一九九四年、一一三頁。

- (30) 『犬養毅への書翰』、三二四頁。

- (31) 藤井昇三「孫文の民族主義再論——アジア主義を中心に——」、『歴史評論』第五四九号、一九九六年一月、二二―二三頁。

- (32) 「与日本広東通訳者記者的談話」(一九二四年四月三〇日)、『孫中山全集』第一〇卷、中華書局、北京、一九八六年、一三四頁。

- (33) 「亜細亜民族の大同団結を図れ 孫文氏語る」、『東京朝日新聞』一九二四年四月二五日。

- (34) 「中国国民党の日本国民への忠告宣言」(一九二四年八月七日)、『孫文選集』第三卷、三三三頁。

- (35) 同右、三三四頁。七月三日の『広州民国日報』の記事によれば、駐日華僑連合会の代表が直接孫文のもとを訪れ、中国人労働者排斥の抗議運動への支持を訴えたところ(李吉奎『孫中山与日本』、広東人民出版社、一九九六年、五七一頁)。このことが、恐らく八月七日の宣言の伏線になっていると考えられる。

- (36) 俞辛焯『孫文の革命運動と日本』、六興出版、一九八九年、三五七頁。

- (37) 『孫中山与日本』、五七三頁。

- (38) 一月一日のインタビューで李烈鈞は、「国際間に在つては、中国を中心として中国、日本、ソ連の三国同盟を結ぶことが最も必要な事柄である」と述べている(『与日本』朝日新聞「記者的談話」、一九二四年二月一日、周元高・孟彭興・舒穎雲編『李烈鈞集』下冊、中華書局、一九九六年、北京、五五一頁)。

- (39) 「李烈鈞に依然として日本に滞在し、アジア大同盟の結成を宣伝すべき旨を命じた電文」、『孫文選集』第三卷、三四六頁。
- (40) 「在黃埔軍官學校告別演説」(一九二三年一月三日)、『孫中山全集』第一卷、二六五―二六六頁。
- (41) 「在廣州各界歡迎會的演説」(一九二三年一月二日)、同前、三〇八頁。
- (42) 「李烈鈞將軍自伝」、章伯鋒・顧亜編『近代稗海』第九輯、四川人民出版社、一九八八年、成都、七四頁。
- (43) この声明書は、後に沢村幸夫が「孫文送迎私記」(『支那』一九三七年八月)の中で、「日本国民に告ぐる書」というタイトルで紹介したものである。
- (44) 「日本と提携せねば時局解決は不可能」、『大阪毎日新聞』一九二四年一月二日。
- (45) そのような見方をするものに、高綱博文「ワシントン体制と孫文の大アジア主義——孫文の日中ソ提携論を中心として——」(池田誠ほか『世界の中の日中関係』、法律文化社、一九九六年、九七―九八頁)がある。
- (46) 「欧米諸国の野心が支那動乱の原因」、『大阪毎日新聞』一九二四年一月二三日。
- (47) 「北上ノ途次本邦ニ立寄りタル孫文一行ノ動静並びニ邦人記者トノ会見模様ニツキ報告ノ件」(一九二四年一月二四日)、『日本外交文書』大正一三年第二冊、五七一頁。
- (48) 「学生は国民會議にぜひ賛成すべきである」(一九二四年一月三日)、『孫文選集』第三卷、三五四頁。
- (49) 「神戸来着ノ孫文ノ船上ニ於ケル記者会見及び埠頭ノ歡迎情況等報告ノ件」(一九二四年一月二五日)、『日本外交文書』大正一三年第二冊、五七二頁。
- (50) 「孫文の革命運動と日本」、三六一―三六二頁。
- (51) 「神戸来着ノ孫文ノ船上ニ於ケル記者会見及び埠頭ノ歡迎情況等報告ノ件」、五七二―五七三頁。及び、「在神戸与日本新聞記者の談話」(一九二四年一月二四日)、『孫中山全集』第一卷、三七二―三七六頁。
- (52) 「孫文氏来る 吾等の苦言」、『大阪毎日新聞』一九二四年一月二四日、『孫文・講演「大アジア主義」資料集』、一二九頁。
- (53) 「孫文氏来る 中庸の二字を忘るな」、『東京日日新聞』一九二四年一月二五日。
- (54) 「日支提携の一事」、『神戸又新日報』一九二四年一月二八日、『孫文・講演「大アジア主義」資料集』、一三六

頁。

(55) 同前。

(56) 「洪沢栄一宛電報」(一九二四年一月二三日)、『孫文・講演「大アジア主義」資料集』、三三六頁。洪沢栄一「孫文氏へのご挨拶大要」(一九二四年一月二七日)、同、三三六―三三八頁。

(57) 葦津珍彦『大アジア主義と頭山満(増補版)』、一九七二年、日本教文社、一七一頁。

(58) 藤本尚則『巨人頭山満翁』、文雅堂書店、一九四二年、五二五頁。

(59) 同前、五二六頁。

(60) 三輪公忠「一九二四年排日移民法の成立と米貨ポイコット——神戸市の場合を中心として——」、細谷千博編『太平洋・アジア圏の国際経済紛争史 一九二二―一九四五』、東京大学出版会、一九八三年、一五六頁。

(61) 「孫文氏講演会社告」、『神戸又新日報』一九二四年一月二七日。

(62) 孫文「大アジア主義」(一九二四年一月二八日)、『孫文選集』第三卷、三七二頁。

(63) 藤井昇三「孫文の『アジア主義』」(辛亥革命研究会編『中国近現代論集』、一九八五年、汲古書院)はその代表的な研究である。

(64) 「大アジア主義」、三七四頁。孫文は一月二七日付けの『中外商業新聞』に掲載されたインタビュー記事において、日中両国国民が「手をにぎつて東洋民族のために、広く言へば世界に於ける被圧迫民族のために、国際的平等を求めねばならぬ。この目的を措いて他に両国の親善を云々することは間違ひである」と述べており、既に彼の考えの中に「被抑圧民族解放のための連帯」という構想ができていたことが理解される(『東洋民族の為め日支の握手 特に貴紙を通じ日本朝野に懇ふ』、洪沢青淵記念財団竜門社編『洪沢栄一伝記資料』第三八巻、洪沢栄一伝記資料刊行会、一九六一年、五八六頁)。

(65) 桑兵「孫中山の国際観およびアジア観試論」、孫文研究会『孫文とアジア』、汲古書院、一九九三年、三二頁。

(66) 「大アジア主義」、三七五頁。

(67) 諸説に関しては高綱博文「孫文の『大アジア主義』講演をめぐって」(『歴史評論』第四九四号、一九九一年六月、六七頁)を参照されたい。

- (68) 「神戸滞在中ノ孫文ノ動静並ビニソノ講演要旨報告ノ件」(一九二四年一月二八日)、『日本外交文書』大正三年第二冊、五七四―五七七頁。
- (69) 「孫文ト面会シタル支那浪人ノ言動」(一九二四年二月一日)、『孫文・講演「大アジア主義」資料集』、二〇六頁。
- (70) 拙著『戴季陶の対日観と中国革命』、東方書店、二〇〇三年、六四頁。
- (71) 「日本は亜細亜に帰れ」、『大阪毎日新聞』一九二四年二月七日、同前、一〇六頁。
- (72) 「孫文の亜細亜自覚論」、『日本及日本人』第六七号、一九二四年二月一日、同前、一四七頁。
- (73) 「亜細亜民族の団結 日支提携の必要」、『大阪毎日新聞』一九二四年二月二日、同前、一四〇―一四二頁。
- (74) 矢野仁一「共和政治の精神的破壊」、『外交時報』第四八二号、一九二五年一月一日、一四八頁。
- (75) 橘樸「孫文の東洋文化論及び中国観——大革命家の最後の努力——」、『月刊支那研究』第一卷第四号、一九二五年三月、一三七頁。
- (76) 小林俊三郎「孫段二氏の外交意見」、『外交時報』第四八二号、一九二五年一月一日、一三三頁。
- (77) 「支那に経済立国策を提唱す」、『改造』一九二五年一月、『孫文・講演「大アジア主義」資料集』、一五〇頁。
- (78) 二十六峰外史「孫文君の去来と亜細亜運動」、『我観』一九二五年一月、同前、一五二頁。
- (79) 同前、一五三頁。